

SALVADOR

小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会会報

代表：松本敏之、大倉一郎
事務局：横浜港南台教会 中沢 譲
〒234-0054 横浜市港南区港南 7-8-29
Tel045-833-5323 Fax045-833-6616
郵便振替口座番号：00210-2-97571

天国に一人を加えて

小井沼眞樹子

多くの皆さんのお祈りとご支援を感謝しつつ、第2任期に入ってから最初の会報をお届けします。

任期間の年末から年始にかけて、珍しく日本で休暇を過ごしました。入院中の姉が弱っていると妹から知らせを受けていて、姉を見舞うことと、昨年6月に、極小未熟児で生まれた孫が順調に育っている姿を見るのが目的でした。

幸い姉は小康状態が続いていて、年明けに見舞うと、「マキちゃん、ブラジルからはるばる来てくれたの、うれしい…」と、か細い声で喜びを表現してくれました。翌日は入浴後で顔色もよく、思わず「お姉さま、桜草の花みたいにきれいよ」と言葉をかけると、「そう？」とうれしそうに微笑んで…ちょうど妹の家の玄関先に桜草がかわいらしい花を咲かせていたのです。姉は小さく可憐なこの花が大好きでした。



今もこの笑顔に励まされながら

別れ際に手を握って祈りますと、「アーメン！」としっかりした声で唱和し、祈りをよく理解して全霊で応答していることが伝わってきました。それが姉との別れとなりました。出国直前にもう一度見舞うつもりでしたが、あいにく私が風邪をひいてしまい、断念して帰路の途についたのです。長旅を終えてサルバドールに帰りつき、丸一日後に訃報が届きました。享年74歳でした。

【姉・節子をめぐって】

その後、姉と共に過ごした幼少の頃からのことが堰を切ったように脳裏によみがえってきました。

I. 誕生から20歳頃まで

3歳年上の姉節子は、昭和19年、父が戦地において留守中に札幌の母の実家で生まれました。小学校に入学する前年、戦後のまだ衛生環境の悪かった時代に日本脳炎に罹患し、一命をとりとめたものの知的障がいを負う身となったのです。以後、母の養育の苦労は測り知れません。父が2年間アメリカに留学中、4人の乳幼児を抱えて、母の失火で住んでいた共同住宅が全焼するという惨事にも見舞われました。小学生時代の私は小憎らしい妹で、すべてに遅い姉をからかい、毎日ドタバタけんか騒ぎを繰り返して母の嘆息のもとを加えていました。姉は小学校を卒業後、都立青鳥養護学校に通い、その後、知的障がい者を雇用していた会社にしばらく勤めました。この頃、ひきつけの発作をしばしば起こし、駅で倒れたとの報を受けて何度か迎えに行ったものです。母は姉の能力を少しでも伸ばそうとして、生花、手芸、料理など、一生懸命教えていました。一方、父は姉の能力不足を叱り飛ばすばかりで、母との間で、時には物が飛び交うほどのいさかいを繰り返していました。

II. 反抗期

成長するにつれ姉の心身の状況も変化し、やがて会社勤めも止めて家にこもるようになり…家族の声掛けを「うるさい！」と一切拒絶し、ガリガリに痩せて、部屋のドアをバタン、バタンと開け閉めして2階から階下へと行ったり来たり、奇行を一日中繰り返すのです。その頃の母は、47歳で最初の脳出血で倒れて以降、回復したものの心身ともに丈夫ではなく、家族がみな出かけて行ってしまうと、姉を恐れて物陰に隠れるようにして暮らしていました。大学の要職にあった父は、学園紛争のさなかで忙しく、家庭を顧みるゆとりがありませんでした。しかし、姉の将来のことを考えるように強く説得し、専門家に相談しに行ってもらいますと、診断は「反抗期で長引くでしょう」ということでした。

20代から30代前半にかけては本当に心痛む可哀
そうな状況でした。

母の小康の合間に私は結婚して実家から離れ、し
ばらく子育てに追われていた間、妹が病院勤務をし
ながら家庭を支えました。やがて、母が脳膿瘍という
病気で小脳を摘出、重度の身体障がい者となったの
です。54歳でした。母が家庭から姿を消した後、身
近に世話をする人が誰もおらず、姉の荒れた生活は
続きました。私は乳幼児2人を連れて、しばらく実家
を手伝っていましたが、引き上げる前に家政婦さん
を頼むようにしました。幸いなことに、優しい人が来
てくれて、姉は少しずつ落ち着き始めました。

Ⅲ. 福祉作業所時代

母は聖ルカ病院に3年近く入院した後、奇跡的に
回復し退院できる見通しが出てきたので、介護を妹
と交替すべく、小井沼一家は4歳と2歳の息子たちを
連れて実家に同居することになりました。

実際に始めてみますと、四六時中不可解な行動を
繰り返す姉との日常生活はとても大変で、福祉事務
所に相談にいきますと、福祉作業所に通うことを勧め
られました。そのためには、知的障がいを認定する
「愛の手帳」が必要なので、嫌がる姉をなだめすかし
て、次男の手をひいて身障者福祉センターに連れて
いきました。

それから、白梅福祉作業所にお弁当を持って、朝
9時から夕方4時まで通う生活が定着するまで半年も
かかりました。これが姉の生活改善の第一歩でした。
保護者会や、遠足などの行事にはできるだけ父に行
ってもらい、父が姉の養育の責任者であることを自覚
してもらうように仕向け…。親子の関係が回復してく
るにつれ、姉もふっくらして元気そうになりました。

Ⅳ. 施設生活

他方、母と姉という大人の障がい者と、3人の乳幼
児、会社員の夫と大学教授の父の同居生活は、想
像を超えて困難でした。幼い子たちが次々に事故や
病気で入院する憂き目に遭い、同居は2年で破綻。
近所の借家に引越して通いの介護生活を3年続けま
した。やがて、会社からの家賃援助の期限が来て、
横浜に家を建てて引っ越すことになりました。義妹
(弟の妻)に介護を引き渡すにあたって、教会の牧師
夫人が、母と姉2人の介護は無理だからどちらかを
施設にお願いしたら、と助言してくださったのです。

知人の紹介で上田市の宝池住吉寮に見学に行き
ました。帰り道、「どうだった？」と聞きますと、思いが
けず「行ってもいいと思う」との返事。憐れみ深い神さ
まの導きと思わされて本当に涙が出ました。

そこから、姉の人生の新たな展開として施設での
生活が始まりました。39歳から63歳まで24年間、リ
ング畑に囲まれた美しい自然環境の中で、小さな一
軒家(自立棟)で寝起きしながら、日中は施設で過
しました。途中で疲れて4ヶ月も入院したこともあり、
姉にとっても容易な生活変化ではなかったでしょう。
けれども、専門の指導員によく介護されて暮らすうち
に、姉らしい人格形成がなされたものと思われま
す。温厚で忍耐強い性格、にっこり笑顔は他の寮生や職
員皆を慰め、得意なカラオケ、様々な作業療法にも
参加して平穏に暮らしていました。85年に母が召さ
れて、7年後に父が再婚し、盆暮れの休暇で実家に
帰ってきても、義母がよく世話をしてくれ安心で
した。その頃には私たちはブラジルでの駐在生活を終
えて帰国、5年間宣教師となるべく準備した後、96年
に再度サンパウロへ旅立ちました。

やがて加齢と共に、姉は入院する頻度が増えてい
きました。父も義母も高齢になってきて、足しげく上
田まで出向くことも難しくなっています。



73歳の誕生日に。千葉の妹宅にて義母と。

Ⅴ. 入院生活

2008年、ついに義弟と妹の英断で、施設を出て
千葉の長田宅で暮らすことになりました。妹夫妻の温
かい配慮でしたけれど、在宅介護は双方にとって負
荷が大きかったようです。2年半後に姉はやせ細っ
て、妹の家から目と鼻の先にある療養型の精神科病
院に入院することに。病院と家を行き来しながら、以
後8年間、義弟の理解と妹の献身的介護のもとで療
養を続け、与えられた人生の旅路を健気に生き抜い
て、天寿を全うしたのです。

【宣教生活 20 年目の希望】

今回の紙面をお借りして、読者の皆さんに姉の生涯を知っていただいて、嬉しく思います。

実際、姉の生活の面倒を見た時期は長く、苦勞したことは山ほどありましたけれど、姉は私の魂を浄めてくれる天使のような存在だったと、今では深く感謝しています。

ブラジルに私がいることをいつも忘れずいたようで、「私の妹はブラジルにいるの」と施設の職員にも話していたそうです。ある時期には「私の名前は小井沼節子です」と言って驚かされたほどで、私は姉からいつも深く愛されていたのです。

上田に会いに行ったときは、一緒に布団を並べて寝る前に、たくさん讚美歌を歌いました。私よりよく歌詞を覚えていて、主の祈りはもちろん、使徒信条もよく暗唱できました。幼少の頃から通った教会生活の恵みが姉の心の底で息づいていました。別れるときにはちぎれるほど手を振っていた姿が、今もくっきりと浮かび上がります。滅多に会えないのだけれど、会いに行ったときの第一声はいつも「マキちゃん、会いたかった！」でした。

同じ家庭から、知的障がいを負って生きる人生を与えられた者と、宣教師として生きるように召し出された者が輩出したことの意味深さを、思いめぐらしています。いのちの存在の不思議を、私は姉と共に生きることによって、深く学ばされたのです。それは、ここブラジルで出会う多くの見捨てられた人々のいのちの不思議にもつながるものであろうかと思わされます。社会の中で評価されることもなく、価値ある人間として認められず、時として不本意にいのちを奪われていく。そういう夥しい、しかし一つ一つのいのちに媒介されて、神の愛は担われ、運ばれ、私たちに慰め、励まし、悪に抵抗していく力を注ぎ、助け合い共に生きる共同体を形作るように促し続けている。紛れもなく、それが私たちの生きている世界の実態ではないでしょうか。巨悪が猛威を振るう絶望的な現実であっても、小さく弱い無辜のいのちが存在する限り、希望は決して滅びません。彼ら彼女らこそが、神の愛の担い手であり、歴史の主人公なのですから。

ブラジル宣教生活20年に際し、小さな宣教師は思いを新たに歩み出しました。小さな人々とのいのちの交わりを喜び、生かされています。

会堂建築はここまで進んできました！



けれども6月現在で、資金が底をつき工事は中断しています。あと700万円ほど必要です。引き続き皆様のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会会計報告 2018.12.1～2019.5.31

収入

項目	金額
会費・特別献金	省略
利息	
小計	
前月より繰越	
合計	

支出

項目	金額
支援金	省略
海外保険	
事務費	
振込手数料	
会堂使用料	
集会費	
小計	
次月へ繰越(通常)	
合計	

収入

項目	金額
会堂建築献金	省略
小計	
前月繰越金	
合計	

支出

項目	金額
支援金	省略
振込手数料	
小計	
次月へ繰越	
合計	

年会費・特別献金者名(敬称略・順不同)

(68名)氏名省略

会堂建築献金者名(敬称略・順不同)

(28名)氏名省略